

# プリンターの進化だけでは品質は保てない、技術者も高い意識を持ち続けることが重要。

キングプリンティング(株)

大正6年、映画看板の製作会社として創業したキングプリンティング(株)。同社は100余年の間に国内初の大判印刷機の開発や大型インクジェット印刷事業の開始、さらにはデジタルサイネージ事業も開始するなど業務を拡大してきた。今回は取締役社長の光弘祐紀氏に、デジタルプリントの現状と今後について訊いた。

## 無いものは自分たちで作り出す、要望に応じて今に至る

——貴社が今日に至るまでの歩みを教えてください。

当社は1917年に絵看板の工房としてスタートしました。当時は映画ブームでしたので、映画看板の需要がすごく多かったんです。この時、職人が20人ほどいたらしいのですが、殺到する注文をさばけないこともしばしばだったようです。そこで、原稿を看板に投影してそれをなぞって下絵にする作画法を独自に開発。これによりクオリティは統一され、作業効率も上がりました。

すると評判が良くなって、さらに注文が増えたんです。とても喜ばしいことなのですが、こうなってくると、いよいよ手描きでは対応できなくなり、印刷で量産しようということになりました。

当時は求める大判印刷機が存在しなかったため、アメリカで紙幣を刷っていた印刷機を輸入し、これをベースに独自の印刷機に仕立てました。これが1954年のことですが、この時点で日本初の大判オフセットの印刷会社となりました。

## デジタルプリントで実現する店舗装飾及び空間演出

——昨今、貴社が受注している最も多



キングプリンティングによる売場装飾の事例(化粧品メーカー)。フロアグラフィックや、商品を模したディスプレイにより、一目で何の店なのか分かる。あわせて空間を華やかにする演出効果もある。デジタルプリントであれば、このような小ロットの依頼にも柔軟に対応できる。

## い仕事のジャンルは何ですか？

オフセット印刷に関してはタペストリーやポスターなどが多いですが、インクジェットは販促物の多品種小ロット対応や、空間演出と呼ばれるような内装の装飾だったり、ショーウィンドウ、あとはポップアップストアの装飾もたくさん手がけています。

今はネットで何でも簡単に買える時代ですが、そういった背景の中で、いかに実店舗を魅力的にして買い物体験の価値を高めるかということ、店の運営者は考えられているのだと思います。

先日東京の大型カフェ用に、高さが5m近くあるスタンドグラス風のツリーをインクジェットプリンターで製作しました。

素材はガラスではなく、ポリカーボネートに高透明塩ビを貼り合わせたもので、色を透かせるようにインクをのせてスタンドグラスのように仕上げました。

この事例は、お客様が光の抜け具合にこだわっており、カラーの下地に薄くホワイトを入れているのですが、その濃度

加減で透け具合が変わるので、微妙な調整を何度も繰り返して、試作に2ヶ月ほど費やしました。

また、化粧品メーカーの売場装飾事例では、対象となる複数の店舗を現地調査して、それぞれの売場に合わせたデザインを作りました。これは施工も手がけているのですが、最近は製作だけでなく施工まで依頼されるケースが増えています。こういった様々な要望に、ワンストップで応えられるのが当社の強みですね。

## 日本に1台のみ、AGFA「JETI TAURO」所有

——貴社が所有する主力プリンターについて教えてください。

店舗装飾や空間演出には、主にAGFAの「JETI TAURO H3300 LED」と「JETI Mira MG2732」を使用しています。「JETI TAURO H3300 LED」は、2年ほど前に日本で初導入しました。いまだに日本では当社の一台のみのようなです。

「JETI TAURO H3300 LED」は、ロー

ルにもリジッドにも対応するハイブリッド型で、ポスターやパネル印刷などに使用します。スピードが速く、生産性の高さが特長です。

また、特殊な素材や厚盛りのような凝った印刷をするときには、「JETI Mira MG2732」のフラットベッドを使います。そのほかにも水性や溶剤、ラテックスも含めてさまざまなメーカーのプリンターを所有しており、全部で30台くらい稼働しています。空間演出が増えたと言いましたが、ポスター類などもこれらのプリンターを使って、大量に印刷していますよ。

## 印刷スピードだけに留まらない自動化で生産性がさらに向上

——デジタルプリントの進化について感じていることを教えてください。

UVやラテックスインクのプリンターが登場し、それに対応する印刷材料のバリエーションも増えており、そうした進化のおかげで、デジタルプリントの活用範囲がますます広がっていると感じています。

そして、今までできなかった表現が、インクジェットで実現できると認知されて、話題になる事例も増えてきたことから、施工側もそれを理解して企画を考えてくれるようになったと思います。

## ——具体的にどのような技術の進化がありますか？

いろんな素材に直接印刷できるようになりましたし、ホワイトやクリアインクにより表現の幅も広がりました。色域や解像度もかなり向上していますね。インクが割れたり、剥がれたりすることが減りましたし、生産性も上がりました。ここ2～3年でいうと、各メーカーが生産の自



「JETI Mira MG2732」による厚盛り印刷で製作したタイトル風の作品。波の部分にはUVインクの特性を活かし、ラメが散りばめられている。

動化に力を入れ始めていると感じます。

例えば、当社はまだ導入していませんが、プリンターに自動搬送装置をつけて、パネルやダンボールを自動で差し込んで次々と印刷することができたり、印刷後にロボットアームが自動でカットということも可能になっています。

あと、最近のプリンターは故障などのトラブルも少なく、ほぼ無人で回せるレベルです。メンテナンスもすごく簡単になっていますし、今後、この流れがさらに進んでいくのではないのでしょうか。

## 複数の拠点で同じ色を出す、そのために必要なこと

——デジタルプリントは、今後どのような用途で使われていくと思いますか？

駅に並ぶ広告やバス停の広告、店頭のパネルやタペストリーなど、サイズと場所が固定されているもの、かつ定期的に入れ替えがあるものは、必然的にデジタルサイネージ化されると思っています。ですのうではない、不定形、不定期、多品種小ロットな用途で需要が増えると考えています。すでにオリジナルグッズだったり、一般消費者向けのものには、デジタルプリントの流れが広がってきています。

また、イベントやポップアップストアもそうですが、昨今では期間限定の一点物の製作依頼が増えており、これに対応できるのがデジタルプリントです。

## ——貴社には4つの拠点がありますよね。それは事業を展開する上で強みになっていますか？

そうですね。現在、当社は東京・大阪・福岡・台湾の4つの拠点を持っています。ただそこにもプリンターがあるよ、というだけではなく、東京のお客様に東京で色校正を見てもらって、現場は海外だとしても、色校正と同じものが再現できるネットワークにしたいと考えています。そのため、拠点間では相当シビアなカラーマッチングをやっています。

## ——複数拠点で同じ色を出力するのは難しいのではないですか？

難しいです。そもそも当社の場合はオ



キングプリンティングの事業を支えるのが約30台のプリンターだ(写真は上からAGFAの「JETI Mira MG2732」、 「JETI TAURO H3300 LED」、EPSONの「SC-S80650」)。

フセットとインクジェットの色を合わせる必要もありますし、複数の拠点にまたがって様々な種類のプリンターがあるので、それぞれを調整していくのはかなり大変です。

色合わせには測色器なども使いますが、最後は人間の目が頼ります。また、そのとき色が合っていない、徐々に狂ってしまうこともあるため、こまめなメンテナンスを継続しています。だけど、そもそもオペレーターに色を合わせる意識がなかったら無理なんです。マシンの性能だけでなく、技術者の意識も高くしなければいけない。そういった教育も当社では行っています。当社にご依頼いただいた方には安心、安定のサービスをご提供できる体制だと自負しています。

拠点を点在させてというのは、他社との連携を行う意味でも良いと思うんです。同業者同士、助け合っていけたら良いですよ。同業者の方でもお困りのことがありましたら、お気軽に当社にお声がけいただけたら幸いです。

【問い合わせ】  
キングプリンティング(株)  
大阪府大阪市西成区玉出西2-7-16  
Tel.06-6659-6341  
<https://www.kingprinting.co.jp>



キングプリンティングの光弘社長。